OVERWATCH 2

ヒーローたちの夜明け

名誉の息づく場所

E. C. MYERS 著

ストーリー
E. C. MYERS

アート
BORG SINABAN

編集
CHLOE FRABONI

制作
BRIANNE MESSINA, AMBER PROUE-THIBODEAU

デザイン
JESSICA RODRIGUEZ

ストーリー監修
MADI BUCKINGHAM, IAN LANDA-BEAVERS

ゲームチーム監修
JEFF CHAMBERLAIN, GAVIN JURGENS-FYHRIE,
PETER C. LEE, MIRANDA MOYER, DION ROGERS

スペシャルサンクス
IAN LANDA-BEAVERS, MADDIY COOK

日本語翻訳
CHI ICHIKAWA

BLIZZARD ENTERTAINMENT

© 2024 Blizzard Entertainment, Inc.
Blizzard and the Blizzard Entertainment logo are trademarks or registered trademarks of Blizzard Entertainment, Inc. in the U.S. or other countries.

ハンゾーは都会を避けて生きてきた。どこを見回しても地平線を遮る高層ビルが立ち並ぶ街、東京。その“影”で生まれ育った彼は、若かりし頃ですら、閑静で時が止まったような鉄坂（カネザカ）を好んでいた。父親の仕事の付き添いで、人工的で無粋な東京の中心部に足を踏み入れたこともあったが、ハンゾーにはその輝きや喧騒がどうしても肌に合わなかった。

そして、再び街を訪れたハンゾーは以前にも増して居心地の悪さを感じていた。通りは前に来た時よりも狭く見え、閉所恐怖症になりそうなほどだ。道は相変わらず死角だらけで、出入口のわかりづらい建物であふれ、窓だけが開いている。暗闇を追い払うためであるはずの派手なネオンや街灯が、街により鮮明な影を落とす。今日も今日とて人混みでごった返す東京は、ヌルセクターの襲来が迫っている今、いつにも増して激しい喧騒に包まれていた。

そして、ハンゾーは人間も避けてきた。

しかし、長年避けてきたのは都会や人だけではない。ハンゾーは大半のことを避けて生きてきた。弟のゲンジを殺めてしまった後悔に憑りつかれ、人や社会と交わることなく、まるで幽霊のように旅をして生きてきた。とはいえ、それも二年前までの話。島田城でゲンジと再会を果たし、弟が生きていたこと知った。

ハンゾーは怯者のごとく再び逃げ出した。長い間逃亡を続けてきたため、他にどうしていいかわからなかったからだ。そして傭兵の仕事に没頭することで、自らに重くのしかかる現実から逃避した。

しかし、有り得べからざる出来事がハンゾーを故郷に呼び戻したのだった。

沖縄で修行に励んでいたある日、世界各地で発生しているヌルセクター侵攻のニュース映像を見ていた時だった。突然、父・島田宗次郎の声が聞こえてきたのだ。

「――やがて、龍は故郷に残してきたものを取り戻すため、家路についた。かつて龍が住んでいたねぐらは虎に奪われ、故郷は脅かされていた。そこで龍は虎穴に入り、敵を知るため導かせた」

名誉と敬意を重んじる時代――宗次郎の教えが生まれた時代は終わりを告げた。しかし、宗次郎がハンゾーに残したものはその言葉だけだった。

ハンゾーが父親の声を最後に聞いてから十四年の月日が経とうとしていたが、それは父の声そのもので、思わず振り向いていた。無論そこに父の姿はなく、彼は落胆すると同時に安堵した。

そこに誰もいるはずなどない。ただ鮮明に記憶が蘇ってきただけかもしれない。宗次郎は、“一族の義務を思い出せ”だとか、“仕える者たちを守れ”などと子供たちによく説いていた。しかし、ハンゾーには父が権力を盾に人を見下ろし、軽々しく説教を唱え、空虚な言葉を並べているようにしか思えなかった。

ハンゾーが一族のもとを去ったとき、父のことを愚か者だと考えていた。橋元が宗次郎を暗殺したことで、どれだけの人々が一族に苦しめられてきたかが明らかになった。敵対勢力、警察、そしてオーバーウォッチ――本来、それらの脅威から身内を守る責任があったというのに。

名誉と敬意を重んじる時代――宗次郎の教えが生まれた時代は終わりを告げた。しかし、宗次郎がハンゾーに残したものはその言葉だけだった。父亡きあと、すぐに結果を求める島田一族の長老たちを前にして、ハンゾーは覚悟も決められぬまま重圧に押し潰され、長老たちの目的を達成するための操り人形になり下がった。宗次郎が築き上げたもの、代々守ってきたものが崩れ去ると、ハンゾーは跡継ぎ失格の烙印を押された。

そして唯一の理解者であった弟を殺めてしまったことで、ハンゾーは生まれて初めて、生涯を捧げてきた自らの責任から逃げ出したのであった。そしてゲンジと再会し、弟がまだ生きていたことを知って以来、何年もまた罪悪感から逃れようとしたが、逃げることはできなかった。そして今、父の声がハンゾーを東京に呼び寄せたのだ。その声があるべき場所へと導いてくれるかもしれない。結果は時が来れば自ずとわかるだろう。

巨大なヌルセクターの司令船はまだ東京からは遠く、都心からその姿を確認することはできないが、人々はすでにパニックに陥っていた。道はどこも大渋滞で、リュックや鞄を背負った人々が徒歩で避難を始め、携帯端末で必死にニュースをチェックしながら、何度も空を見上げている。

ハンゾーは混乱の中を通り抜け、静かに人の流れと反対方向へ進んだ。ヌルセクターは必ずやって来る。多くの罪なき人々が銃撃戦に巻き込まれ、ここにいる多くは助からないだろう。

警察や救急車のサイレンの音に混じって、けたたましい空襲警報が遠くで鳴り響く。しかし、人々の安全を確保し、避難指示を提供すべきはずの警察の姿が見当たらない。ハンゾーが辺りを見回すと、黒いスーツにネクタイ姿の男たち九人組が歩いているのが見えた。そのうち数名は鬼のお面を被っている。歩道を我が物顔で歩き、歩行者に道を空けさせている。橋元組だ。

ハンゾーがシャッターの閉まった本屋の陰に身を隠すと、橋元組のチンピラのひとりが老人にぶつかり、老人が転んで食料や衣服の詰まった買い物袋を落とす姿が見えた。

「どこ見て歩いてんだよ、ジジイ」

黒い髪を結ったチンピラが叫ぶ。

「お許しを！どうかお許しを！」

老人が必死に落ちた物をかき集めていると、チンピラたちは老人の持ち物を蹴とばし嘲笑した。ハンゾーは歯を食いしばった。橋元組は人々を守ってなどいない。この地に住み着いた恥ずべき寄生虫である。

――*父上の見せたかったものはこれか？*黙考するハンゾー。橋元組が卑劣で残酷なことなどとうに知っている。自分が今この瞬間ここにいるのは、もっと重要な理由があるはずだ。

髪を結った男が荒々しい声を上げ、チンピラたちは去っていった。何やら急いでいる様子だったが、そうでなければ逃げ惑う人々にもっと嫌がらせをしていたに違いない。多くのチンピラたちが大人数で移動している様を見たハンゾーは、ヌルセクターの侵攻に備えて橋元組に招集がかかり、本部に向かっているのだろうと考えた。もしかしたら、敵自らが虎の穴に案内してくれるかもしれない。

ハンゾーは老人を哀れみの目で一瞥し、その場を後にした。

少しして、橋元組一行は路地の前で立ち止まり、辺りを見回した。ハンゾーは身を隠し、九人の男たちが細い脇道に入ってから六十秒数えると尾行を再会した。

路地は閑散としていて、壁伝いにゴミ箱が並んでいた。下衆の住処にはぴったりの場所だが、肝心の奴らの姿が見当たらない。弓を引き、辺りを警戒しながら慎重に路地を進んでいくと、行き止まりに突き当たった。

「道に迷ったみたいだな」

ゴミ箱の陰から髪を結った男が出てくる。そして、銃やナイフを持った他の組員たちが次々に姿を現した。

「案内してやるぜ。あの世にな」

前方には五人。背後でガラスを踏む音――残りの四人は背後にいる。ハンゾーは囲まれていた。

弓を構え、髪を結った男を狙う。

「おい、正気かよ？俺たちと弓でやり合おうってのか？」

髪を結った男が吠える。

ハンゾーは目を細めて言い放った。

「やり合うまでもない」

一切無駄のない動きで放たれる矢。風切り音を立てながら頭上をかすめると、髪を結った男は笑った。

「どこ狙ってやがる！」

ハンゾーは男の後ろを指差した。振り返ろうとして、結った髪がレンガの壁に矢で射留められていることに気付く男。みるみるうちにその顔から笑みが消えていく。

ハンゾーは静かに再び矢を引く。

「今のは警告に過ぎん」

男が目にかかる後れ毛を息で吹き飛ばして叫ぶ。

「何をモタモタしてやがる！？そいつをやれ！」

正面にいた三人の男がナイフを振り回しながらハンゾーに襲い掛かる。そのうち二人を射抜き、次の矢を引こうとしているところに三人目が距離を詰めてきた。間一髪、弓でナイフを防ぐが、ハンゾーの左頬に刃先が触れた。男の胸を蹴り飛ばして距離を取る。そして大きく弓を振ると、男はのけぞり、ナイフが音を立てて地面に落ちた。

ハンゾーは手の甲で顔の血を拭った。――*危なかった。拙者も腕が鈍ったようだ。*

一歩下がり、背後にいた者たちが視界に入るように弧を描いて移動する。目論見どおり、残りの四人が色とりどりの鬼の面を被っているのが見えた。髪を結った男と残りのチンピラたちの銃口がハンゾーを捉える。

飛び交う銃弾が金属音を鳴らす中、ハンゾーは大型ゴミ容器の陰に素早く身を隠す。弓で狙おうと顔を出した瞬間、ハンゾーの左肩に銃弾が食い込んだ。焼けつくような痛みが走り、うめきながら弓を下ろした。

「やったぞ！」

髪を結った男が誇らしげに叫ぶ。

「こっちに弓を投げて、両手を上げて出てこい。話を聞いてやるよ」

チンピラたちが笑い声を上げる。

身を隠したままでは狙いをつけられない。ハンゾーはケガの痛みに歯を食いしばり、反対側のゴミ容器に向かって矢を放った。金属製の容器が倒れ、路地にゴミがこぼれる。

「バカがあがきやがって」

髪を結った男がそう言うと同時に、転がったゴミ容器に刺さった“鳴響矢水”が高周波パルスを発する。これで路地にいるチンピラ全員の位置が把握できた。ハンゾーは慎重に狙いを定めると、これまで積んだ鍛錬と本能に従い、素早く矢の嵐を放つ。矢は壁やゴミ容器に跳ね返り、鋭い角度で飛び交っていく。叫び声を上げて慌てふためく敵。二人の男が苦悶の声を上げている。どうやら何本かは命中したようだ。

肩の傷口を確認すると、弾は貫通していた。それでも出血の勢いは激しく、めまいがし、視界にもやがかかる。ハンゾーは鋭く息を吸い込み、もやを振り払おうとした。

明滅しながら輝きを放つその刀は、まるで大きな力を発しようとしているかのようだ。しかし、何か様子がおかしい。力場がまるで安定していないのだ。

「いい加減にしろ！例の刀でさっさと叩き斬れ！」

髪を結った男が叫ぶ。

ハンゾーはため息をつくと、弓を構えた。

不意に、金属とアスファルトの擦れる音を響かせながら、両脇にあったゴミ容器が動かされる。もはや遮蔽物はない。対となる白鬼と黒鬼の面を付けた二人のチンピラが、ハンゾーに太刀を向けて左右から迫る。ハンゾーの顔に浮かんだ笑みは、怪しげに青く光る刀を見て凍り付いた。その光は、彼の“嵐ノ弓”の持つ特別な力を引き出した時の光と似ていた。

明滅しながら輝きを放つその刀は、まるで大きな力を発しようとしているかのようだ。しかし、何か様子がおかしい。力場がまるで安定していないのだ。島田一族の刀を模倣したものなのだろうが、島田の刀を使いこなせるのは島田一族のみ。橋元組の者たちはその刀を使いこなせていないようだった。

黒鬼の男がハンゾーに迫る――どうやら剣の腕は立つようだ。ハンゾーがなんとか弓を使って刃を交わすと、白鬼の男がハンゾーの右腕に斬りかかった。ハンゾーはその腕を掴み、引き寄せて頭突きをする。一瞬視界が白くなるが、白鬼はよろめき、刀を落として崩れ落ちた。ハンゾーはその刀を蹴り飛ばすと、黒鬼の方を向く。男の隣に赤鬼の面を被った男が並んだ。

ハンゾーは何本かの矢を放つが、体に出血の影響が出始めていた。男たちは刀で矢を弾き、間合いを詰めてくる。バチバチと音を立てながら放電する刃。やがて他のチンピラたちも体勢を立て直し、ハンゾーは次第に追い詰められていった。

橋元組はよく組織化されていた。ハンゾーもそれは認めざるをえなかった。もはや残る矢は敵の数よりも少ない。集中し、素早く三本の矢を放つ。黒鬼が倒れ伏す。もう一本射ようと矢筒に手を伸ばすが、その手は空を切った。代わりにハンゾーは拳を握り締め、一番近くにいた赤鬼を殴りつける。面は砕け散り、赤鬼が地面に倒れ込んだ。

遠巻きに様子をうかがうチンピラたちにしびれを切らし、ハンゾーは自ら攻めに転じる。彼はがむしゃらに戦った。この場を切り抜けるために――生きるために。

かつての父のように橋元組に屈してはならない。奴らに図に乗らせるわけにはいかない。

狭い戦場を舞のごとく駆け、殴り、弓を振り、跳躍し、躱す。落ちていた矢を何本か回収もできた。しかし、ハンゾーは確実に消耗していく。練度で劣る橋元組にも、数という力がある。ここは橋元組のお膝元、東京なのだ。たったひとりで立ち向かうハンゾーを橋元組が圧倒するのも時間の問題だった。すでにハンゾーは大量の血を失っており、矢も最後の一本しか残っていない。

――*上等だ。*

ハンゾーは嵐ノ弓をチャージし、最後に残った矢を放つ。白熱したエネルギーが象るのは、絡み合う二匹の龍。路地を突き抜ける双龍が敵を次々に屠っていく。

起死回生の一撃を生き残ったのは、髪を結った男とその子分数名だけだった。残った者たちに対峙するハンゾー。その手は弓をしっかりと握り、足元はふらついていた。地面にしたたる血はほとんど彼の流したものだ。

敵はにわかに気圧され、困惑の視線を交わす。チンピラのひとりが髪を結った男に何かささやいた。男はじっとハンゾーを見つめ、こうつぶやいた。

「島田」

ハンゾーは防御の姿勢を取ろうとするが、ぐらりと揺れ、倒れた。もはや意識も朦朧としている。取り落とした弓をチンピラの一人が拾い上げ、顔が見えるようにハンゾーの髪を掴んで引き上げる。髪を結った男は、血に塗れながらも諦めの悪いハンゾーの顔を覗き込んで言った。

「お前は一体何なんだ？」

「ただの通りすがりだ」

男の顔に唾を吐きかけるハンゾー。男は顔を拭いながら後ずさると、ハンゾーの弓で殴りつけた。俯くハンゾーの右頬に痛みが広がった。

「連れていけ」

手下たちがハンゾーの腕を掴み、必要以上にきつく、結束バンドで後ろ手に縛り上げる。うまく焦点の合わない彼の目に、壁に描かれた真っ赤な落書きが映った。誰かが消そうとした形跡があるが、なんとか文字は読み取れる。その壁にはこう書かれていた――“虎穴に入らずんば虎児を得ず”。

ハンゾーはにやっと笑い、意識を手放した。

目を覚ますと、コンクリートの狭い独房にいた。そこにはハンゾーが横たわっている肌ざわりの悪い板と、プラスチックのバケツが一つ隅に転がっているだけで、他には何もない。反対側を見ると、硬質光の壁が琥珀色の光を放っている。その向こうには人型の見張りロボットが立っていた。そのオム

ニックの金属製のボディは、見張っている装甲扉とまったく同じ、鈍い銀と暗灰色をしていた。
　ハンゾーが大きなあくびをすると、顎が鳴った。腫れた右頬をそっと撫でる。奥歯の一本がぐらついていた。肩の傷はきれいに消毒され、包帯が巻かれている。ハンゾーは橋元組が自分の手当をしたことに心から驚いた。しかし、覚えの無い打ち身や擦り傷が、この場所へ連行される際に乱雑に扱われたことを物語っていた。ここはどこだろうか。橋元組の根城にたどり着けたのだろうか。なぜわざわざ捕虜に？どうしてとどめを刺さなかった？ハンゾーの頭は疑問でいっぱいだった。
　「拙者はどれくらい意識を失っていた？」
　ハンゾーは見張りのオムニックに尋ねた。
　返事はない。
　ハンゾーは諦めなかった。
　「ここはどこだ？」
　ここが東京であるかも確証がもてなかった。
　見張りは少し体を動かしたが、相変わらず返事はなかった。
　「水をもらえないか？」
　ついに見張りが反応した。
　「うるさいぞ」
　「喉がカラカラなんだ」
　オムニックが扉をノックすると、ややあって扉が開いた。見張りは出て行き、扉には鍵がかけられた。
　ハンゾーは意識と無意識の境界をさまよい、時間の感覚を失った。数時間ほど経ったように感じたころ、再び扉の鍵が開く音が聞こえた。彼は即座に覚醒するも、目を閉じたまま戦いに備えて体に力を入れ、そっと独房に入ってくる訪問者を待ち受けた。
　「しばらくぶりだな、若君」
　男が口を開く。
　またしても聞き覚えのある声にハンゾーは目を見開き、飛び起きて固まった。独房の檻の外に立っていたのは他でもない山神敏郎だった。ハンゾーの記憶よりも年を取っており、痩せてはいるものの、弱々しさはない。
　ハンゾーは、その才能ある刀鍛冶が、何度も何度も金属を熱し、槌で叩き、刀を鍛造する姿を見たことがあった。信じられないほどの薄さにもかかわらず、鋼鉄よりも硬く鋭いその刀は、後にその独自技術が完全に統合される前から群を抜いていた。
　彼の打った最高の一振りと同じように、ここ数年の逆境すらも彼を鍛え上げるものでしかない――山神敏郎とは、そのような印象を与える人物だった。
　「敏郎先生、こんなところで何を？」
　「生き永らえておるよ」

ハンゾーが家を去った後、島田家は長老たちの手で自滅の一途をたどり、かつての栄華は見る影もなく崩れ去っていった。そしてすぐにオーバーウォッチにより島田家は息の根を止められた。

ハンゾーは息を呑んだ。先ほど橋元組のチンピラが持っていた刀は模造品などではない。かつて島田家に仕えた刀匠が、今では橋元組のために刀や武器を作っているのだ。

「橋元組のような寄生虫の手助けをすることで？」

敏郎は瞳にかつての強さを灯し、表情と声色を一変させた。

「とうの昔に故郷を離れた君に、我ら一家が味わった苦しみを理解してもらおうとは思わん」

ハンゾーは顔をしかめた。今の今までハンゾーは敏郎やその家族――妻の山神朝、娘の霧子（キリコ）の境遇など考えたことがなかった。ハンゾーが家を去った後、島田家は長老たちの手で自滅の一途をたどり、かつての栄華は見る影もなく崩れ去っていった。そしてすぐにオーバーウォッチにより島田家は息の根を止められた。ハンゾーは敏郎や朝がこれまでと変わらず生きていくものだと思い込んでいた。しかし、それは自分が傷つかないための幻想に過ぎない。変わらないものなどありはしないのだ。毎年弟の弔いで島田城を訪れるたび、彼は橋元組に汚されていく故郷をその目で見ていた。オーバーウォッチが島田一族を退かせた後、橋元組が後釜に座ったことも知っていた。

「昔より仕事が雑になったようですね」

ハンゾーが言い放つ。

敏郎の目から強さが消えた。

「大量生産を強いられていてはな……材料や道具も足りていない」

敏郎とハンゾーの父は同世代で、その物腰や話し方が似ていることから、しばしば親戚だと勘違いされることもあった。主従関係こそハッキリとしていたが、お互いに尊敬の念をもって接していた。

敏郎もハンゾーの父親も、言外に別の意味を込めるかのように、言葉を選んで話すのが特徴だった。ハンゾーは考える。ここにある材料や道具のせいにして、橋元組の戦力を削ぐために、わざと刀を粗末に作っているのではないだろうか。

しかし、ハンゾーは傲慢な若殿のごとく、山神家の人々をただの家来として見下してきた。それが改めて敏郎を前にして、敏郎の家族の方がよっぽど自分よりも名誉を重んじていたことを知り、恥じ入るほかなかった。

もしそうであれば、職人という仕事に誇りを持っていた敏郎にとって、さぞ屈辱的なことだろう。

「かの山神の鍛えた鋼が人々を恐怖に陥れているとは、拙者も穏やかではいられませんが」

その上チンピラたちは、その価値も扱い方も知らずに敏郎の技で造り上げられた刀を振るっているのだ。

敏郎の眉間に皺が寄る。

「この世の中、白黒決まって変わらぬものなどない。良きも悪しきも、すべてはその者の行動次第」

白髪をたくわえた敏郎が、まるで加工前の鋼鉄を見極めるかのようにハンゾーをじっと見つめる。「この八年間、橋元に刀を捧げることで、私は大切な者たちを守り抜いてきた。かたや、君は何を成し遂げたという？」

「相変わらず、先生の言葉は打つ刀よりもよく切れる」

「刀は使い手を表すもの。鈍き者の刃は鈍く、研ぎ澄まされた我が刀を使いこなせるのは、それに相応しい者のみ」

ハンゾーをじっと見つめる敏郎。

「振るう者の技だけでなく、敬意を持って振るわれることを願い、私は刀を打っている」

ハンゾーは自分を恥じた。敏郎は、ハンゾーとゲンジ、それにキリコに剣の手ほどきをしてくれた山神朝の夫である。そして朝は島田一族の最も偉大な忍であるだけでなく、島田留美子が家族を捨てた後、ハンゾーやゲンジにとって母親に最も近しい存在だった。

しかし、ハンゾーは傲慢な若殿のごとく、山神家の人々をただの家来として見下してきた。それが改めて敏郎を前にして、敏郎の家族の方がよっぽど自分よりも名誉を重んじていたことを知り、恥じ入るほかなかった。自分の手には余ると責任から逃げたハンゾーに対し、山神家の人々はここに残

り、苦難に、本来ならハンゾーが背負うべきだった重責に耐えてきたのだ。あの頃からは変わったとはいえ、ハンゾーが現在の彼らの苦境に加担したことに変わりはなかった。

「拙者は――」

ハンゾーは言葉を飲み込んだ。

「いえ、仰る通りです。ここを離れ過ぎました。朝先生はお元気ですか？」

「朝は今も鉄坂で秩序の維持にあたっておるよ」

朝は、誰の手にも負えなかった島田兄弟を剣の稽古に勤しませたほどの人物だ。尻に敷かれているのは橋元組の方かもしれないとハンゾーは思った。

言葉の厳しさとは裏腹に、敏郎の目にはまだ温かみがあった。ハンゾーは敏郎がいつもすぐに笑顔を見せてくれていたことを思い出した。たとえ何も喜ぶ理由がないときも、まるで二人だけが知っている笑い話でもあるかのように、笑いかけてくれていたものだ。

かつて、剣を向けることなく相手を無力化する方法もまた、剣術と同じくらい重要だと朝が話していたことがある。言葉と笑顔が武器になるのだと。朝や敏郎のその“武器”は、橋元組相手にも大いに役立ったに違いない。

しかし、二人がハンゾーの父親に仕えていた頃に見せていた笑顔もまた、それと変わりはなかったのかもしれない。

「こうして若君と再会できたことは嬉しいが、目的が何であれ、君はここに来るべきではなかった」

「捕まる気はありませんでしたよ」ハンゾーは不機嫌そうに言った。

敏郎が小さく笑う。

「橋元組の長老たちが言うには、君の嵐ノ弓は私の作った代物以外に考えられないそうだ」

そう言って、ひび割れ固くなった手のひらを見せる。

「君の身元を確認するように橋元組に言われてきた。島田の跡継ぎを手中に収めた今、君を処刑すれば人々の希望は露と消える。一石二鳥というわけだ」

「橋元組が島田の後継者の首を取りたいのなら、そんな者はいないと伝えてください。島田一族はとうの昔に――父と共に滅びている。父は島田の名を継ぐに相応しい者を残さなかった。残されたのは代々引き継がれてきた嘘、失敗、そして悪行だけだ」

非の打ち所のない刀が完成した時にそうするように、敏郎は舌を鳴らした。

「君の父は実業家であり、犯罪者だった。だが、常に人々のため、とりわけ家族には尽くしていた。虎を、さらなる悪を寄せ付けないように努めていた。愛する者を守ることで、遺産という名の希望を残すこともできる」

二人はしばらくお互いのことを考えた。ハンゾーにとって、それは辛い過去を映し出すような鏡であり、同時に可能性の兆しでもあった。

敏郎はハンゾーの考えを代弁するかのように言った。

「故郷に戻ってきてくれた君を宗次郎どのも誇りに思うだろう」

ハンゾーは腕を組んで応える。
「だとしたら、初めてのことですね」

敏郎は悲しそうに微笑んだ。
「そんなわけがなかろう」

「君を見ていると確かに昔のことも思い出すが、私には君、そして娘の中にいつも見てきたものがある。我々が築き上げようとしている未来だ。子らが生きている限り、希望も、彼らの受け継ぐ世界への夢も生き続ける」

背を向け、扉の方に歩き出す敏郎。

「龍の息子はとどめを刺すのも気の毒なほどボロボロだと伝えよう。島田家の名残は跡形もなく絶たれたと」

ハンゾーは殴られたように息を呑んだ。

「言葉の真意は行動で決まる」

彼が扉を叩く。

誠意は行動で示すもの――ハンゾーの脳裏に、ゲンジに最後に言われた言葉が浮かぶ。――*「兄者、生きる理由を探すんだ」*

ハンゾーが敏郎に頭を下げると、敏郎もまた黙礼で返す。そしてささやくような声で言った。

「ここを出ることができたら、どうかキリコを探してくれ。そしてあの子に、もっと手紙を書いてあげられなくて、もっと一緒にいてやれなくて申し訳ないと伝えてほしい。それから……橋元組を抑えるための勇気ある行動を誇りに思っていると」

ハンゾーは頷いた。

「故郷に戻ってきてくれた君を宗次郎どのも誇りに思うだろう」

ハンゾーは腕を組んで応える。
「だとしたら、初めてのことですね」
敏郎は悲しそうに微笑んだ。
「そんなわけがなかろう」
扉が開くと、敏郎は橋元組の護衛の方に振り向いた。敏郎が護衛に連れていかれる姿は、老いた刀鍛冶が橋元組の管理下にあり、その逆ではないということを物語っていた。しかし、橋元組の支配下に留まることを選択したのは敏郎自身に他ならなかった。
扉が閉まると、ハンゾーは足を組みながら床に体を下ろした。考えなければならないことが山ほどあった。

次に扉が開いたとき、ハンゾーはただ事ではないことを直ぐに察知した。橋元組の組員が二人、独房に踏み入ってくる。刀を抜いた男が一人と、あの髪を結った男だった。髪を結った男は結束バンドを持っている。
「向こうを向いて、手を後ろに回せ」
「殺すなら今殺せ」
ハンゾーが言い捨てる。
「上がお前の死ぬ姿を見たいそうだ。避難する前にな」
「フン、好きにしろ」
背を向けて手を後ろに回すハンゾー。肩の怪我にもお構いなしに、髪を結った男が乱暴に手を縛り付ける。ハンゾーが若かりし頃、今よりも大胆で傲慢だった彼が弟に対して「目隠しされて手を縛られていても敵に勝てる」と豪語していたことを、橋元組はもちろん知る由もない。その言葉を耳にした朝が剣術の訓練にそれを取り入れてくれたことも。
無知がゆえに、目隠しすらしないという愚行を冒すのだ。
路地では多勢に無勢だったが、相手が二人だけなら、弓がなくとも、むしろ手を使わずとも容易に倒せる。ハンゾーはその後のことを考えた。彼はもう逃げるつもりはない。人々が苦しむ姿に高みの見物を決め込む橋元組の幹部らを、自らの目で確認したかった。
彼が苦手としていた、朝の教えの一つがハンゾーの脳裏をよぎった。
「いつ剣を振り、いつ剣を振らないかを考えなさい。好機をうかがうことが良い結果に繋がることもあるのです」
ハンゾーはその教えを守り、待った。そして前を歩く愚か者たちに迷宮のような本拠地を案内させた。
首の後ろがむずがゆくなる感覚を覚え、何者かに監視されていることを確信する。彼は歩く速度を落とし、周囲に視線を向けた。すると廊下の最奥に一台の監視カメラが見えた。しかし、ハンゾー

にとって監視カメラがあるのは端から想定内であり、それでもなお監視されている感覚が拭い去れなかった。この監視カメラとは別に、何か、もしくは誰かが見ているはずだ。

「止まるな。さっさと歩け」

髪を結った男が急かす。

ハンゾーは呼吸を整え、再び歩き出した。男たちはハンゾーをゲート付きのエレベーターに押し込み、髪を結った男が伸縮式のゲートを閉めて三階行きのボタンを押した。エレベーターがゆっくりと上がっていく。男が再びクランクを回してゲートを開くと、広々とした会議室が現れる。奥の一段高くなったテーブルを橋元組の幹部が囲み、黒いスーツを着た四人の警備がその脇を固めていた。髪を結った男はハンゾーを乱暴に押し、幹部の傍らに控えた。

ハンゾーは誰が橋元組の首魁なのか探ろうとした。最初に口を開いたのは、中央に座っていた真っ白な髪の女性だった。

「シマダ・ハンゾー」

「島田の名は捨てた」

ハンゾーが言葉を返す。

右端にいる眠そうな目をした男が、胸の前で指先を合わせながら言った。

「そなたがその名を捨てても、その名がそなたを捨てることはない。龍はいつまで経っても龍だ」

「死ぬまで、ね」

左端の厚化粧の女が冗談っぽく言い放つと、他の幹部たちも含み笑いを浮かべた。

「お前は島田家最後の跡継ぎ。つまり、我らが最後の敵――」

最初に口を開いた女性が言った。

「ついに皆の目前で橋元が島田の血に終止符を打つ時が訪れた」

ハンゾーはドローンカメラが警備兵の上空を浮遊し、様子を録画していることに気付く。

ハンゾーはテーブルの上に置かれた空の矢筒と嵐ノ弓に目をやった。

「相手になってやる。最初は誰だ？」

ハンゾーは言い放った。

幹部たちは顔を見合わせ、満面の笑みを浮かべた。

「龍を討つには鉛の玉で十分だ」

髪を結った男に背中に銃を押し当てられ、ハンゾーに緊張が走る。カメラが近づき、彼の顔を照明で照らした。すべては人々を恐怖に陥れるため――ハンゾーは父と同じ運命を辿り、抵抗すらも許されず殺されようとしていた。

銃の撃鉄を起こす音が鳴る。それがハンゾーの反撃の合図となった。

「殺せ」

髪を結った男が引き金を引こうとしたその時、会議室の照明が明滅した。まるで暗闇の中で見つ

刹那、彼の目に光を反射する何かが映る。ハンゾー目掛けて飛んできたクナイが、手首に傷一つ付けずに拘束を切り裂いた。

められているかのように、先ほどと同じ感覚を覚えるハンゾー。すると突如、青白く光る狐が現れ、驚く橋元組の幹部たちの横を通り過ぎ、ハンゾーと髪を結った男の周りを回り出した。

混乱の中、ハンゾーは身をよじらせ、負傷していない方の肩で髪を結った男にぶつかり、男の手から銃を叩き落とす。そして思い切り遠くに蹴り飛ばした。

刹那、彼の目に光を反射する何かが映る。ハンゾー目掛けて飛んできたクナイが、手首に傷一つ付けずに拘束を切り裂いた。ハンゾーは上を見上げ、吹き抜けの天井のパネルに目をやる。すると、吹き抜けから何ものかが身軽に着地した。白と緋色の巫女衣装に赤いスニーカーを履き、赤いフードで顔の下半分を覆ったその人物。橋本組の誰かが声を上げると、幹部たちは一斉に机の後ろに逃げ込んだ。

ハンゾーは髪を結った男のパンチを見事にかわし、回し蹴りを放つ。男は吠えながら再び殴りかかってきたが、ハンゾーはすでに宙を舞っていた。前方宙返りから男の肩に両脚で組み付き、頭を挟んで体をひねる。そのまま投げ倒すと、背中を強く打ち付けた男は起き上がってこない。

ハンゾーはすかさず立ち上がり、先ほどから彼を観察していたのはこの闖入者だったことに気付く。狐の耳型ヘッドバンドと、そこに描かれた漢字のシンボルを見る限り、さきほどの狐を放った人物であることがうかがえる。

しかし、ハンゾーにはそれをゆっくり考えている時間はなかった。橋元組のオムニックが青いエネルギーを放つ刀で襲い掛かってくるのが見えた。力の付与された刀が持つ破壊力を知るハンゾーは、その攻撃を躱す。何か武器が必要だった。

狐の忍者がオムニックに突進し、クナイを交差させオムニックの刀を防ぐ。そのまま蹴りでオムニックを転倒させるも、相手はすぐに起き上がり、刀を振るって忍者と斬り結ぶ。

狐の忍者は軽快な動きでオムニックを翻弄し、相手の周りを飛び回りながら小刀で打撃を与え続けた。ついにオムニックは刀を構えることができなくなり、背中を向けた。

何ひとつ言葉を交わすことなく、ハンゾーと狐の忍者は背中合わせになり、残りの敵と対峙した。ハンゾーは痛む腕を伸ばし、力を入れる。光る狐を連れた忍者と共に立ち回るその感覚たるや、まるで父がよく話してくれた寓話の中にいるようだった。

刀を光らせながら、橋元組の新たな増援が群がってくる。ハンゾーと忍者との連携は、まるで生涯を共に戦ってきたかのようだった。部屋の中央で立ち位置を入れ替えながら戦う二人。忍者がクナイで敵の武装を落とし、ハンゾーが素手で敵にとどめを刺す。忍者の腕は確かだったが、その荒い呼吸が体力の限界に達していることを物語っていた。元々の怪我に加え、さらに傷を負ったハンゾーも限界は近かった。肩の銃創が開き、腕を動かすたびに痛みが走った。

最後のひとりが倒れると、狐の忍者はハンゾーの方を振り向いた。

「行くよ！あいつらを逃がすわけにはいかない！」

その声はハンゾーが昔知っていた少女のそれと似ていた。

気がつくと、部屋の扉が開いていた。橋元組の幹部たちの姿もない。倒れ伏す組員たちを無造作にまたいで弓と矢筒を回収すると、誰かが矢を補充してくれていた。

廊下には不気味なほどに人影がなく、静まり返っていた。ふと窓の外に目をやると、ハンゾーは思わず声を上げた。その横で狐の忍者も息を呑む。

東京タワーの上空にヌルセクターの司令船が浮かび、そこから黒い斑点が流れ落ちている。世界の終わりを告げる雨のごとく、船からドロップポッドが街に降り注いでいた。東京の空に兵器による爆発が巻き起こる。ヌルセクターの数に圧倒され、徐々に追い詰められていく警察や民兵。今まさに、この街はヌルセクターに侵略されていた。

妨害に遭うことなく二人が階段を駆け降り、外に出ると、橋元組の装甲車が列を成して離れていくのが見えた。

「まだ追いつける！」

ハンゾーは言った。

しかし、忍者がハンゾーの腕に手を置く。

「ダメ」

そして深呼吸して言った。

「みんなが私たちを必要としてる」

通りはすでに戦闘ロボットで溢れていた。人々は悲鳴を上げて逃げ惑っている。ハンゾーは街に漂う臭いに衝撃を受けた。オゾン、灰、硫黄――まさに絶望と死の臭いだ。

ヌルセクターによるパリ襲撃の映像を見ていたものの、実際にそれを目の当たりにすると、ヌルセクターがもたらす殺戮や破壊は想像を絶するものだった。

しかし、この惨劇は確かな現実であり、ハンゾーの沽券に関わる問題であった。ふと、都心の目と鼻の先にある鉄坂からも火や煙が上がっていることに気付く。ヌルセクターがここを制圧した後、ドローンは東京近郊の人口の少ない地域を狙い始め、街から逃げ出した人々を追い詰めていくはずだ。東京以外の都市はほぼ無防備と言える。もし東京が陥落し、ヌルセクターが足場を築けば、ドミノ式に他の地域も制圧されてしまうだろう。

隣の忍に頷くハンゾー。彼女がクナイを抜いたのを見て、自分も矢をつがえる。二人が近くを飛び

「相変わらず生意気だ」

狐の忍者、キリコは微笑んだ。「そっちは相変わらず可愛くない。助けなきゃよかった」

回っていた戦闘ロボットを連携して撃ち落とし、地面に墜落させると、狙われていた人々は二人に頭を下げて去ろうとした。

「そこだ」

ハンゾーは彼らを呼び止め、扉が開いたままの橋元組の本拠地を指差す。

「そこなら隠れる場所がたくさんある。攻撃が落ち着くまで隠れていろ」

少なくとも橋元組が自分達の拠点を取り戻しにくるまでは安全だろう。それも、もし戻ってくればの話だ。

一時的に辺りの状況が落ち着くと、ハンゾーは狐の忍者に振り向いた。

「拙者はお前を知っている」

ハンゾーは言った。

「こっちだって。島田のことなら多少は知ってる」

ハンゾーは構えようとして、腕を下ろした。一方、彼女も刀をしまうと、自らフードを緩めて顔を露わにする。それがハンゾーの記憶を呼び覚ました。ハンゾーやゲンジの後をついてくる少女。ゲンジがゲームセンターで必死にハイスコアを出そうとしている時も、横で座って眺めていた。島田城の縁側から花火を一緒に見物した夜も、彼女は一緒にいた。父を亡くした日、ゲンジとハンゾーに夕食を持ってきてくれた――二人を慰めようと、おびただしい数の餅を盆に載せて。

「相変わらず生意気だ」

狐の忍者、キリコは微笑んだ。

「そっちは相変わらず可愛くない。助けなきゃよかった」

「手助けなど必要なかった」

ハンゾーはキリコと親しかったとは言えない。当時の彼にそんな余裕はなかった。その両肩には重い責任がのしかかり、すでに決められた役目があった。しかし、キリコらしい棘のある言葉とその声

が、長きに渡り故郷を離れていたハンゾーの、心の奥底にしまい込んだ記憶をすべて蘇らせた。
　普段はただの使用人の面倒な娘として接していたにもかかわらず、ハンゾーが誰かを必要としたとき、誰もいなかったとき、そばにいてくれたのはいつもキリコだった。
　「だが……おかげで連中の気が逸れたのも事実」
　渋々といった感じで続ける。
　「その点については礼を言おう、キリコ」
　「ほんっとバカ。でも、寂しかったよ」
　人差し指と親指でつまむ仕草をするキリコ。
　「ほんのこれくらいね」
　ハンゾーは打ち捨てられた橋元組の本拠地を振り返る。
　「拙者を助けに来たわけではなかろう。ここに連れてこられるとは拙者も知らなかったのだからな」
　「ご名答、あなたを助けにきたわけじゃない」
　キリコはため息をついた。
　「敏郎どのか」
　「橋元組は何年も前に父を誘拐した。たまに連絡を取ることを許されてるみたいだけど、ここ数か月連絡がなかった。だから、ヌルセクターの襲撃をうまく利用して、手遅れになる前に助け出そうと思ったんだけど……お狐様が導いたのはあなたの下ってわけ」
　涙を流してもいないのに、キリコが目元を拭う。
　「きっとここに父はいなかったんだね」
　「敏郎どのとここで会った」
　「いつ？」
　「ここに連れてこられた時だ。伝言を頼まれた……橋元組に抵抗するお前を誇りに思っていると」
　キリコはハンゾーと反対方向を向くと、以前は装甲車が並んでいた場所を見つめた。
　キリコの家族は皆、それぞれのやり方で名誉と責任を重んじてきた。敏郎は家族が自由を奪われぬよう、自らの自由を犠牲にし、橋元組に関する情報を故郷の人々に伝える役目を果たした。朝は鉄坂をまとめ、橋元組の支配から人々を守った。そしてキリコは反旗を翻し、その支配力を弱体化し、人々に希望を与え続けてきた。
　彼らの犠牲の上に立つハンゾーは、自らの存在が小さく思えた。
　名誉を重んじることと逃げ出すことは紙一重である。ハンゾーは名誉を言い訳に使い、正しい行いや難しい選択から逃げてきた。
　キリコは目を細め、煙の立ち込める空を見上げた。
　「オーバーウォッチは来ると思う？」

「勝利した龍がかつて住んでいたねぐらに入ると、そこは空っぽで寒々としていた。虎はすべて奪っていった。しかし、そこで龍は自分が求めていたものは財宝や臣下ではなかったことを悟った。龍は自らの善行により、失っていた最も貴重なもの、“故郷”を取り戻したのだ」

再びハンゾーの方をちらりと見る彼女。

ハンゾーは、ゲンジがパリでオーバーウォッチに復帰していたことは知っていたが、キリコの表情を見る限り、彼女もすでにそれを知っているようだ。しかし、キリコはその前にハンゾーとゲンジの間に何があったか知っているのだろうか？キリコはゲンジとの再会を喜ぶだろう。しかし、ハンゾーは再会する覚悟がまだできていなかった。そして、自らの口でそれを語りたいと思えなかった。

キリコはしばらく返事を待ってから、ため息をついた。

「鉄坂を守る人がいない。橋元組なんて論外。仲間と一緒に出来る限りのことはしてきたけど、現状維持が精一杯。手に負えないよ、こんなの……」

ヌルセクターの船に目をやるキリコ。

「私がどこに行ってたか知ったら、母はきっとカンカンに怒るだろうな。まあ、帰ってから考えればいいや。ねえ、私たちなかなか息が合ってたと思わない？」

ハンゾーは頷いた。

「ああ、記憶していたほど役立たずではなかった」

すると、再び島田宗次郎の声がハンゾーに語りかける。

「勝利した龍がかつて住んでいたねぐらに入ると、そこは空っぽで寒々としていた。虎はすべて奪っていった。しかし、そこで龍は自分が求めていたものは財宝や臣下ではなかったことを悟った。龍は自らの善行により、失っていた最も貴重なもの、“故郷”を取り戻したのだ」

ハンゾーは数回瞬きをした。空気中の煙が目に染みる。

「鉄坂に戻るべきか」

驚いた様子のキリコ。

「私と一緒に来てくれるってこと？」

「お狐様とやらがお前を拙者の下へ導いてくれたことには感謝している」

ハンゾーは言った。――*そして、これまで探し求めていた人生の目的に龍が導いてくれたことにも。*

キリコは紙切れを一枚取り出すと、それをハンゾーの胸に貼り付ける。ハンゾーは困惑した様子でそれを見下ろした。

「それ、回復のお札」

キリコは言った。

「癒やしは私の役目でしょ」

ハンゾーは心の機微や感傷といったものに今まで縁がなかった。しかし、それが変わりつつあるのかもしれない。キリコは今や命の恩人であり、今の自分があるのはあらゆる意味でキリコの両親のおかげだった。そして、彼らは未だにハンゾーが目指すべき人物像の模範となり、それを行動で示し続けている。

キリコの家族は何世代にも渡り、島田家に仕えてきた。今こそ、ハンゾーがキリコやその家族、そして人々に仕える時が来たのだ。これは父が息子に教えようとしていた教訓であり、ハンゾーはそれを理解するために時間が必要だった。

並んで通りを往く二人。壊れたヌルセクターの戦闘ロボットを後にしながら、二人はゆっくりと家路についた。